

ふわり、と足元が揺れた。

「……………」

湿り気を帯びた夜風が頬をなでる。顔を上げると、視界はぼんやりとにじんで、街灯の光が滲んで見えた。

倉田ひよりは、何度目かも分からない足取りのふらつきに、思わず立ち止まった。

ヒールがアスファルトにひっきり、よろけそうになったところを、横から手を添えられて辛うじて体勢を立て直す。

「大丈夫？ ひよりちゃん、結構酔ってるね」

隣で肩を支える声。——誰だっけ、この人……。

——あ、池田くんだ。

同じ会社の営業。軽いノリで誰とでもすぐ仲良くなるタイプ。飲み会のたびに隣の席に座ってくる、ちよっと苦手な人。今日は送別会だった。

お酒は弱いのに、場を壊さないようにって無理して飲んで。乾杯、ビール、お酌、笑顔、返事、愛想笑い。

そんなことをずっと続けていたら、気づけば頭がガンガンして、足もまともに動かなくなっていた。

「このへん、ホテル多いし、ちよっと休んでいこう？ ね？」

腰に回された手がぐっと強くなる。

「……え？ いや、でも……わたし……」

「大丈夫、何もしないから。ちょっと休むだけ」

そう言いながら、池田の手は腰骨から太ももの裏へと滑ってきていた。

ぞくり、とした感覚が走る。嫌だ。けれど、酔った体が思うように動かない。

何か言わなきゃと思うのに、口が回らない。

——助けて。誰か。

「おい」

その瞬間、夜を裂くような低い声が飛んできた。

ぴたりと空気が止まる。池田の手が、さっと離れる。

「何やってんだ、お前」

制服の警察官が、静かに、しかし怒気を込めて歩み寄ってくる。

その姿に、池田は明らかに顔を引きつらせた。

「えっ、ち、違いますよ？ 俺はただ、この子を——」

「言い訳すんな。とつとと失せろ」

「は、はいっ！」

逃げるように走り去っていく池田の背中を見送りもせず、警察官——久我拓海はひよりへと目を向けた。

その視線が鋭くて、刺さるように痛い。

でも、なぜか怖くはなかった。

「……お前、ほんととバカか」

「た……くみ……？」

「酔ってフラフラしてんのに、こんな時間にこんなところで、知らねえ男と二人で……。どんな神経してんだよ、お前は」  
制服の胸元。見慣れた警察章。

学生の頃から変わらない声で、久我はぐいと腕を掴んできた。

「送ってく」

「えっ、でも……あの、迷惑じゃ……」

「うるせえ。歩けるか？」

叱るような口調に、ひよりは小さく頷くしかなかった。

手を引かれて歩く帰り道。

相変わらず視界はにじんでいるのに、その背中だけは、なぜかはつきりと見えていた。

「ほんつと……お前ってヤツは」

低く唸るような声が、夜の住宅街に響いた。

制服の襟元から覗くネクタイの結び目が少し乱れているのが、妙に懐かしく見えた。

ひよりはその隣で、よろめきながらなんとか歩調を合わせようとしていた。

「た……くみくん……ごめん……」

謝る声はか細く、言葉半分に消えていく。

久我の視線がちらりとこちらを向く。目が合うと、すぐにそらされた。

「謝るなら最初からフラフラすんな。お前みたいな危なっかしい女が一人で歩いてるだけで事件だぞ」

怒気混じりの口調とは裏腹に、掴まれた腕は決して強くない。

むしろ、振り払おうと思えば振り払えてしまうくらいの加減で。

だけど今は、その温もりがひどく安心する。

「……どうしたの、こんなところで……?」

「巡回中。ちょうどパトロールに来てたら、お前が見えた」

ぶつきらぼうな答えに、ひよりはへと笑った。

「拓海くんって……ほんとタイミングいいよね」

「運が悪いんだよ」

そう言って足早に進む彼の背中を追いかける。

近所に住む幼馴染だった拓海は、ひよりにとって頼れるお兄ちゃんのような存在で、何かとドジを踏んでは泣きじゃくるひよりの手をよく引いてくれていた。二個年が離れているからいつも一緒にいるわけではなかったけど、ひよりが困っているときに現れては助けてくれていたのだ。

それは社会人になっても変わらず、警察官になって忙しいにもかかわらずたまに家にやってきては散らかった部屋を片付けたたり、料理を作り置きしていく様は世話焼きの母親に近いものだった。

「おい、ちゃんとまっすぐ歩け」

「んー……、」

ひよりはふらふらと拓海の背中にぶつかる。広く大きな背中が動じることもなくひよりのことを受け止める。

ひよりの酔った頭には、拓海の背中がぬくもりが妙に心地よかった。子供のころと同じように、無意識に額を押しつける。

「なんだよ急に」

拓海の声は呆れたように響くが、その足が止まったのは確かだ。振り向きもせずに、ため息をひとつつく。

「……だつてえ」

気づけば声が漏れていた。頬が拓海の背中にぴとりと貼りついたまま、動けない。動きたくない。

「だつてえ……たくみくん、怒ってる……」

背中にくっついたまま、ぽつりとこぼす。

その言葉がどこか寂しげに聞こえたのか、拓海は小さく息を吐いた。

「そりゃ怒るだろ。……あんな時間に、あんなところで、あんな男に連れ込まれそうになって。お前、自分がどういう目に遭ってたか、分かってんのか」

「んー……でも……」

「でも、じゃねえ」

ぴしやりと切り返す声。けど、いつものような鋭さはない。むしろ、どこか迷いを含んだような、そんな口ぶりだった。

拓海の制服越しに伝わってくる体温は、じんわりと熱を帯びていた。

どくん、と自分の鼓動が耳の奥で響く。酔ってるせいだけじゃない、これは。離れたくないな、と思った。

「たくみくんの背中、……あったかい」

小さく呟くと、拓海の背筋がぴくりと反応したのが分かった。

彼の喉が、ごくりと鳴ったのも聞こえた。振り返らないまま、固まっている。

拓海くんの背中があったかくて、少しだけ汗の匂いがして、

なぜだろう、それが——たまらなく、懐かしかった。

「ねえ、たくみくん……」

背中にぴとりと額を押しつけたまま、声を絞り出すように呟く。

「ぎゅーって、して？」

「……は？」

声が、硬く揺れたのがわかる。

ふだんなら、ここで「なに言ってるんだバカ」と一蹴されて終わるはずだった。

でも今日は、なぜかそれがなかった。

ひよりは、酔った頭のまま、心のままに口を開いた。

「ひとりで帰るの、さみしかったの……おうち、暗いし……さびしい……」

ぽつぽつと、弱音がこぼれていく。いつもなら言わないような言葉も、止まらなかった。

そうしたら、拓海の背中がぴたりと止まって、しばらく何も言わなくなった。

その沈黙に、なんとなく「まずいかな」と思ったけど、酔ってるせいで勢いが止まらない。

「たくみくん、……ぎゅーってしてよ……？　お願い、こわかったの……やだったの……」

喉の奥で、何かがぐつぐつと煮える音がしたような気がした。

そのまま、背中に腕を回そうと手を伸ばす——その瞬間だった。

拓海が、くると振り返った。

ぐい、と掴まれる手首。目の前には、怒ったような、でもそれ以上に必死な表情の拓海がいた。

いつもと違う、目の奥がきらきらしていて、焦げるような熱がそこに宿っていた。

低い声で唸るように言いながら、拓海はそのままひよりを引き寄せた。

身体ごと、ずるりと胸元に引き込まれる。



制服のボタンが頬に当たって、少し冷たい。でも、抱き寄せる腕は熱くて、たくましくて、震えてた。

「……ほんと、ふざけんなよ……ひより……」

耳元で名前を呼ばれた。それだけで、胸の奥がきゅうつとなった。

「こんなは無防備にして……俺が、どんな気持ちでお前のこと見てたと思ってんだよ」

「……たくみくん？」

名前を呼びながら見上げると、すぐそこに拓海の顔があった。

夜の街灯に照らされた横顔は、どこか陰しくて、普段見せる優しさが影を潜めている。

けれど、ひよりにはその顔さえ、安心できるものに思えて仕方なかった。

「さびしかったの……ほんとに、ちょっとだけ、ぎゅーってしてくれたら……それだけでよかったのに……」

ぼつぼつと出てくる言葉は、自分でも何を言ってるのか、よく分かっていなかった。

けど、気持ちは本当だった。拓海の匂いがして、腕があったかくて、今だけでいいから全部忘れさせてくれたら、それでよかった。

「お願い……もう、怒らないでえ……拓海くん……わたし、……なんでもするからあ……」

そう言っただけで、さがるようにしがみつく。

肩口に額を預けて、ふにやりと笑いかけると、拓海の身体がびくりと震えた。

「……お前さあ……」

唸るような声。その低さが、なぜだかいつもより近くに聞こえる。

「……ほんとに、わかってねえよな」

「ん……？」

問い返す間もなく、ぐいと腰を引き寄せられた。

気づけば、拓海の片腕がひよりの背中を支えていた。片方の手は、彼女の頬をぐいと上げるように掴んでいた。

制服のボタンが擦れる音。息がかかる距離。

「こんな状態で、男の前で、甘えた顔見せて……無防備にくっついて……」

その口調は怒ってるようで、それ以上に熱かった。

——そして、次の瞬間。

唇を塞がれた。

とろけるような熱。柔らかいのに、逃がさない力強さ。

最初は戸惑って、けれど、すぐに拓海の舌がひよりの中へと入り込んでくると、酔ってぼやけていた頭がぐるぐると回り

だす。

心臓の音が早鐘のように響いて、手足の感覚がどんどん熱くなっていく。

息が苦しくなるまで吸い尽くされて、離された唇から、名残惜しげな吐息が漏れた。

「……たくみ、くん……？」

「……もう、我慢できねえから」

その言葉と一緒に、彼の手が腰を抱き上げるように動いた。

制服のごつい感触が、逆に心地よくて、ぬくもりが全身にじんわりと染み込んでくる。

頬を赤く染めたまま、ひよりはうわごとのように呟いた。

「……うん……、やだって言わないから……」

その瞬間、拓海の目の奥に灯ったものを、ひよりはまだ知らない。